

ベンゾジアゼピン受容体作動薬の減量における医師と薬剤師の連携

湯山 康彦¹, 今城 宏文¹, 堀内 沙江¹, 一瀬 康弘¹, 久保田 賢治¹, 串田 一樹²,

¹アーク調剤薬局, ²昭和薬科大学

【目的】

ベンゾジアゼピン受容体作動薬は、有効性が高い一方で、依存性や、減薬・休薬時の離脱症状などの有害事象発現リスクへの懸念がある。日本は数年前より診療報酬改定による抗不安薬と睡眠薬の多剤処方抑制施策が導入されているが、諸外国に比べて使用量が多いとされている。

今回は施設患者において、医師と薬剤師の連携によるベンゾジアゼピン受容体作動薬の減量の取り組みを報告する。

【方法】

平成31年2月1日～4月30日の3か月間で、山梨県大月市に所在する特別養護老人ホームA施設の入居者のうち、1年以上ベンゾジアゼピン受容体作動薬を同一の成分を同一の1日当たり用量で連続して処方されている患者数、減量可能であった患者数、減量方法、薬剤師の提案内容、医師への提案方法、減量後の症状について後ろ向き調査を行った。

【結果】

施設入居者56名の内、1年以上ベンゾジアゼピン受容体作動薬を同一成分同一用量で連続処方されていた患者人数13名で、減量可能であった症例は13名であった。

すべての症例で薬剤師から減量方法と減量後3日、7日、14日後の睡眠状況、離脱症状の発現、日中の変化について、状況を観察することを提案した。観察した症状は13症例すべてでトレーシングレポートでの経過の報告を行った。

【考察】

薬剤師が薬の適正使用に関わり減量できたことで、今後長期使用による出現の可能性のある薬剤による依存や転倒などの有害事象の発現リスクの軽減に寄与できたと考える。ベンゾジアゼピン受容体作動薬は有効性が高い薬剤であるが、その一方で有害事象や依存などのリスクが存在することから適正使用が必要である。今回のように薬剤師が積極的に適正使用に関わることで、依存や有害事象の回避が可能となる為、薬剤師の重要な役割の一つと考える。また、薬剤師の対人業務の充実が求められている中、投薬後の患者状態を医師にフィードバックすることで共有し、患者の安全性を確保することは、今後の薬剤師の職務として求められることのひとつと考えられる。

今回の研究は、減薬するための過程であり、更なる減量、減薬は今後の課題である。